

【研究テーマ】

「幼児が法則性や一般性に自ら気付く体験」に繋がる環境を構成できる力を持つ保育者を養成するための教育の在り方についての研究

【研究概要】

本研究は、「幼児が法則性や一般性に自ら気付く体験」に繋がる環境を構成できる力を持つ保育者を養成するための、教育の在り方の提案を目的としている。現在は、本研究が目的とする力を育成する教育の「ミニマムスタンダード」の設定を目指して研究を遂行している。最近では、特に「教育内容」「保育者に求められる力」に関連する研究を実施している。以下に、ここ最近に取り組んだ内容について、その概要を記述する。1 本研究の根幹である、幼児期の教育で扱う「規則性・法則性」について検討した。具体的には1947年の(試案)保育要領から、現行の幼稚園教育要領解説までを対象として考察した。2 教育内容を導くために、過去からの指導書・要領解説に示された規則性・法則性の具体例を整理・分類した上で、教育内容として取り入れることができると考える例を抽出、カテゴリー化した。3 本研究の教育方法に示唆を与えられ、米国の「Building Structures with Young Children Trainer's Guide」に関する検討を行った。

【研究テーマ】

- 1 ジョン・デューイ教育学研究
- 2 アクティブラーニングを活用した授業実践

【研究概要】

- 1 ジョン・デューイの反省的経験論について文献研究を行っている。
- 2 彼の教育方法の流れをくんだ、アクティブ・ラーニングを実際の教育現場でどのように実践していくかについても考察している。
- 3 科学研究費のテーマ「教学 PDCA のための ICT を活用したカリキュラム・マップの新汎用的可視化法の開発」を、新規科目「教育方法・通信技術活用論」との関連で理論及び実践の視点で考える。

【研究テーマ】

- 1 保育者の職能形成
- 2 幼児期にふさわしい生活を支える保育の創造

【研究概要】

1 保育者の職能形成

保育者(学生を含む)の職能形成 保育者の職能は、そのまま子どもの育ちに大きく関わる事はいうまでも無い。保育者としての職能形成は、専門的学びをはじめめる大学生からはじめめる必要がある。大学教員となり設定した「保育者の職能形成」では、課程内外で学生の職能意識と職能技術の向上を図る取り組みを論文としてまとめている。現役保育者における職務能力向上の取り組みとしては、複数の研究会を立ち上げ、その実績を論文・学会等で発表している。

2 幼児期にふさわしい生活を支える保育の創造

幼児期にふさわしい生活を支える保育の創造とは、幼児期の生活は未分化で、以降の学習過程や学習方法と異なる学びの姿がある。それは、環境を通しての教育であり、対象となる子ども期にふさわしい具体的で総合的な生活を通してなされる教育である。そのため、子ども期にふさわしい生活を支える保育は多岐に渡る。子どもが暮らす環境を構成する。発達にふさわしい活動がある。同年齢異年齢との関わりがある。身近な社会の出来事に触れる暮らしがある。身近な大人との絆が築ける出会いがある。そして何より、子どもの心と身体の発達に関与する保育者の資質を高める事が必要となる。様々な角度から、研究を進めるため、フィールドワークを大切にしながら、実践的研究を行っている。

【研究テーマ】

1. ピアノ連弾曲における表現方法
2. ピアノ初心者の音楽的表現力の習得方法について—読譜の観点から
3. 初等教育の教諭が音楽科で求められるピアノ表現について
4. オンラインによるピアノ指導法について

【研究概要】

1. ピアノ連弾曲における表現方法
連弾曲は独奏曲と異なる表現技術が求められる。Primo 担当の右手旋律の表現と Second 担当の右手では曲目にもよるが役割が異なる。外声と内声の響きのバランス等について他の楽器の音色との比較をしながら探っている。
2. ピアノ初心者の音楽的表現力の習得方法について
初心者は楽譜を正確に弾くことを最終目的のように練習を重ねているが、各楽曲の本質を理解し、それを表現しなければ表現したとは言えないと考える。それでは、楽譜をどのように読めば本質に近づけるのか、ということについて思考している。
3. 初等教育の教諭が音楽科で求められるピアノ表現について
初等教育の音楽科も高学年では音楽専科教員が配置されることが多いが、低学年等の多くではクラス担任が指導する。その折に最低限、歌唱共通教材については曲を理解し、模範唱、模範奏することが求められており、児童の音楽表現に影響が大きいことからどのような表現力を習得することが必要か考えている。
4. オンラインによるピアノ指導法について
基本的に楽器の指導は対面指導が望ましいが、事情により実施できない場合の指導法として様々な遠隔授業の方法が考えられるのではないかと。ピアノ初心者にとっても有効な指導方法について遠隔授業の中で試行を重ね、対面授業とも比較し検討している。

【研究テーマ】

- 1.平面造形作品の制作にかかわる研究
- 2.美術に苦手意識を持つ学生についての研究
- 3.美術教育に関わる研究

【研究概要】

- 1.平面造形作品の制作にかかわる研究

4月兵庫二紀展、6月関西二紀展、10月二紀展への出品作品の制作。本年度は、コロナの影響で中止・延期となっている。

- 2.美術に苦手意識を持つ学生についての研究

平成元年度末に図画工作Iを履修した学生に対して、アンケートを取り結果を集計・分析中。

- 3.美術教育に関わる研究

平成30年度までの、図画工作I履修学生の作品、制作状況及び学生アンケートを基に構想中。

【研究テーマ】

絵本間につながりを持った意味ネットワーク型の絵本データベースの構築

【研究概要】

絵本は幼児の豊かな創造や言語に対する感覚を養う重要な教材として位置付けられている。保育現場では日常的に絵本の読み聞かせが行われている。そこで本研究では、絵本を読む順番に意味を持たせ、思考力・判断力・表現力などの創造的・論理的側面の力の育成を、幼児期から意識した絵本の読み聞かせができる保育者を育てる授業カリキュラムの構築を目指す。

【研究テーマ】

1.保育者養成課程で保護者支援を実践できる力をもつ保育者を養成する教育方法の研究

2.子どものための絵本環境-子どもの育ち・発達と絵本の活用方法

【研究概要】

1.保育者養成課程における、保護者に対する支援を実践できる力をもつ保育者を養成するための教育方法の開発に取り組んでいる。4年間の養成段階において保育者として求められる力のどこまで教育すればよいのか、つまりどのような教育内容、教育方法を設定すればよいかについて、学生の4年間の育ちをふまえて開発し、その効果の検証を行いながら検討している。教育方法として、まず保護者参加型教育プログラムを開発し、課題改善と課題に対する教育効果の検証を行ってきた。正統的周辺参加の概念を導入し、2~4年次の科目を連動させることで、上の学年と一緒に活動することで支えられる教育方法を開発した。

保育者養成校段階における最低限必要となる知識・技能等(ミニマムスタンダード)の設定については、当初予定していた研究方法がコロナ禍で実施不可能となったため再検討し、保護者支援・子育て支援の実践力の評価指標に関する先行研究を集約し、検討する。その中から、保護者支援・子育て支援の実践力に関するルーブリック評価項目、行動尺度、力量形成力カテゴリー等に関する研究内容を抽出する。そして、開発した教育方法である教育プログラムの実践映像や、グループ討議の逐語記録内容との比較検討や検証を通して、保育者養成段階における保護者支援実践力の評価の視点と評価デザインの提案をめざす。具体的には、保護者支援に関する知識の習得に向けた意欲をより適切に評価するため、知識の習得の実態を正しく自己判断できるルーブリックあるいはチェックシート等の提案をめざしたい。

2.就学前の子どもの育ちにおいて、絵本(・本)に親しむ環境の重要性が世界的に注目されている。東京大学発達保育実践政策学センターと(株)ポプラ社共同研究プロジェクトの研究報告等を参考にしながら、子どもの絵本環境として、特に子どもの育ち・発達をより豊かに導く絵本の活用方法について、実践を通して検討する。保育・幼児教育の教材開発にもつながるよう具体的方法を提案していきたい。

【研究テーマ】

1. アクティブ・ラーニングを支えるコミュニケーションの在り方

(manaba による文字言語での振り返りを通して)

2. 新教育課程に対応した読解・記述力を高める縮約基盤型 e ラーニング AI システムの

構築

3. 遠隔授業における双方向型の授業の在り方

【研究概要】

1. 自分の学びの成果を振り返る場を何度もくり、学修者自身がどのような学びを得たのかを振り返りメタ認知する過程について観察を行う。本年度は、遠隔授業における文字言語での振り返りを蓄積し、形態素解析を行う。

2. 2022(令和 4)年から高等学校において「新学習指導要領」が年次進行で実施され、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける」ことを目的とするカリキュラムがスタートする。新学習指導要領の完全実施によって児童、生徒の読解力や表現力の向上が図られ実社会や大学においてその力を発揮することとなる。しかし、読解力や表現力は、個人によって習熟度が異なるため、個々に応じた個別の指導が必要となる。とりわけ高等教育機関において多数の学生を対象として日々個別指導することは、教員の時間的制約のため現実的には難しく、その実現は困難である。

そこで本研究は、学生の読解力・表現力の向上を図るための情報学の機械学習(AI)と統計を応用した「縮約基盤型 e ラーニング AI システム」の構築を目指す。これにより、わが国の大学生の読解力と表現力の向上に大きく寄与することが可能である。

3. manaba におけるプロジェクト掲示板の活用によって、学生同士や教師と学生との対話型授業を実現。

【研究テーマ】

- 1.障害福祉
- 2.障害観・偏見・差別
- 3.社会的養護
- 4.保育士の専門性(保育ソーシャルワーク)と人材養成

【研究概要】

- 1.障害のある人の地域生活支援に向けた法制度・実践論研究
- 2.障害の捉え方、障害に対する偏見変容と差別に関する研究
- 3.社会的養護における入所児童の自立支援に関する実践論研究
- 4.施設保育士の専門性(保育ソーシャルワーク)、人材の養成・定着・キャリア ラダーに関する研究

<科研>

1.障害等への偏見変容に向けたインクルーシブ保育と保育者養成教育のあり方に関する研究(日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C);2019年4月～2022年3月)

2.保育所保育士による保育ソーシャルワークの可能性と養成教育のあり方に関する研究(日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C); 2015年4月～2019年3月)について、個人研究として継続中。

【研究テーマ】

- 1 大学の授業と大学の事業の連携による学生資質の向上
- 2 質の高い言語活動をめざした国語科授業デザイン
ー大阪府中核市における授業力向上ー
- 3 学生の読解力の把握と読解力向上への支援方法
- 4 国語科における特別支援教育の視点と実践
- 5 インクルーシブ防災の現状と方向性

【研究概要】

- 1 大学 1 年次の保育職、教育職をめざす学生の不安や期待を探ると共に、授業の中で「子育て総合視線施設 KIT」を活用した現場実践の効果を測る。「KIT」の実践的な学びを通して、入学前に描く抽象的な教育者像や保育者像が、どのように具体化し将来の職業イメージへとつなげていくか、その過程を検証する。そして、3 年後の本実習後に追跡調査を行い、早期体験実習のプログラムがどのようにつながっているか、その連続性を明らかにする。
- 2 国語科における主体的・対話的で深い学びを実現するために、現行の授業を分析し、改善点を明らかにする。そのために、教師の国語科指導に対する先入観(ステレオタイプの指導方法)や苦手意識を質問紙法で探る。また現行の授業における言語活動の有無とその質を分析し、「言語活動を通した」効果的な指導方法を開発、実践する。また、公立小学校の 5 年、6 年生を対象に読解力スキルテスト(RST)を実施し、その分析から児童の読解力の傾向や今後の指導法を開発する。
- 3 学生に対して RST(読解力スキルテスト)を実施し、その分析を通して学生の読解力の傾向を明らかにする。また、読解力を向上させるための方策を「アカデミックライティング」等の授業において開発、実践する。
- 4 従来国語科では、特別な配慮を要する児童についての指導方法はほとんど開発されてこなかった。本研究は、特別支援教育の理論を国語科に反映することによって、国語科における合理的配慮がより理論的、効果的になることをめざしている。

5 防災教育は教育現場で浸透きて来ているが、特別な支援を要する児童・生徒について最適な防災教育は模索段階である。本研究では、現状を分析するとともに、自助・共助を実現していくための、特別な支援とは何か、という視点でインクルーシブ防災を考察する。

【研究テーマ】

- 1 離島の社会性ハチ類の分布・生態調査
- 2 白色変異セトウチサンショウウオの長期飼育と遺伝
- 3 里山の生物調査

【研究概要】

- 1 離島に生息する社会性ハチ類の分布と生態を調査
特に ヒメホソアシナガバチ属の分布について(台湾と屋久島間の空白地帯はなぜ存在するのか?)
- 2 2003年に神戸市北区小河町で捕獲した セトウチサンショウウオの白色変異個体を飼育し、子孫への白色変異の遺伝を調査
- 3 神戸市を中心に里山の生物相を写真撮影し、生態系の変化を調査

所属学科：こども教育学科 脇本 聡美

【研究テーマ】

小学校英語教育における英語絵本読み聞かせ活動の効果の検証

【研究概要】

英語絵本を小学校英語教育の教材とすることによる効果を検証する研究を計画している。具体的には、高学年児童が低学年児童に英語絵本を読み聞かせる活動という形で実施する。英語絵本の読み聞かせ活動が、児童の英語を読むことへの不安感や苦手意識の改善、英語学習に対する期待や自信の高揚における効果を検証する。

【研究テーマ】

こども(幼児、児童)の動感身体知について

【研究概要】

新しい動きを発生させる機会が多い幼児期や児童期において、こどもはどのような動感身体知を発生させるのか、さらに動感身体知の視点から動きの指導や援助を行うためには、どのようにすればいいかを考えている。

新しい動きを覚える世界では、自分の内側から起こる動感と向き合いながら動いている。その動感はどのように発生し、どのように変容するか、また、自分自身の動く感じが分かる能力はどのように習熟していくのか、そして新しい動きを覚える時に、保育者や教育者はどのようにして、こどもの運動発生を促すのかを研究している。

【研究テーマ】

子どもの学びを保障するインクルーシブ保育方法について

【研究概要】

乳幼児期における遊びを通した学びを保障するための保育は、今の子どもの姿に対するアプローチと中長期的な発達を見据えた関わりが重要になるため、保育者としての経験や力量が求められる。

特に支援を必要とする子どもの場合、子どもの障害の特性だけでなく、家庭での子育て状況も影響を与えていることが多く、保育者はその現状を理解し、保育を行う必要があるが、子どもへどのようにアプローチすることが有効なのか、保護者へどのように関わるのがよいのかなど、保育者自身の保育経験不足や障害に関する知識の不足によって、その関わり方に対して困り感を持っている現状も見受けられる。

その現状を踏まえて、子どもや保護者の現状に応じた丁寧な関わりができるための保育技術や、子どもがスムーズに活動に入りやすい環境など、実践の場における具体的な保育方法の指導助言をのあり方を模索する。

【研究テーマ】

- 1 「ピアノを用いない」ピアノ教授法の構築
- 2 ピアノ演奏
- 3 子育て支援、子どもの音楽教育

【研究概要】

- 1 「ピアノを用いない」ピアノ教授法の構築

ピアノ学習者に対し、効率的かつ効果的なピアノ指導法の構築を目指している。「ピアノを用いない」練習時間に焦点をあて、イメージ・トレーニング、LMS を活用した「音符の言語化」の効果を解析し、検証している。

- 2 ピアノ演奏

ピアノ作品、室内楽作品の演奏会用レパートリーを増やしている。

- 3 子育て支援、子どもの音楽教育

0歳からのクラシック音楽コンサートを定期的に行うためのプログラム開発。昨今注目されている「知育」「育脳」、さまざまな教育、メソッドを融合させ、理論に裏付けされた音楽を中心とした子育て支援プログラムによるコンサート開催を目指している。

【研究テーマ】

1. 大学の授業と大学の事業の連携による学生資質の向上
2. 子どもの貧困と社会政策―被保護有子世帯を対象に―
3. 少子化対策-少子化の動向とワーク・ライフ・バランスなどの政策的課題-

【研究概要】

1. 大学の授業と大学の事業の連携による学生資質の向上
現代の日本において少子化対策のカギを握る子育て支援は最重要課題になっている。そして、教育者や保育者の人材不足が叫ばれる一方で、卒業後すぐに即戦力が求められ、養成校時代の職業意識との乖離に直面し、早期に退職してしまうケースが後を絶たない。そのため、早期に職業意識の定着や動機づけをもたせる実践的な学びを経験し、本実習のモチベーションにつなげることで、先のリアリティショック防止が可能だと考える。そこで、具体的には、教育学部こども教育学科 1 回生を対象に、本学が所有する「KIT」の実践的な学びを通して、入学前に描く抽象的な教育者像や保育者像が、どのように具体化し将来の職業イメージへとつなげていくか、その過程を検証する。
2. 子どもの貧困と社会政策―被保護有子世帯を対象に―
本研究は子どもの貧困の歴史的蓄積の中身を徹底的に掘り下げることで、子どもの貧困の現代的な課題を透視する研究である。また、本研究の目的は以下の 3 点である。
 - 1 子どもの貧困に関する実態把握や事実検証
本研究は、日本における貧困の歴史的系譜をたどることで、現代的示唆を得ることを目的とする。また、上記は「子どもの貧困対策に関する大綱」のなかにある「子どもの貧困に関する調査研究等」の「子どもの貧困対策に関する情報の収集、蓄積、提供」の部分に該当する。
 - 2 子どもの貧困対策と生活保護制度の逆行問題の要因解明
1 の考察によりみえてくる現代的示唆のなかで、とくに子どもの貧困対策と生活保護制度の関係に着目しながら、逆行問題の要因を引き出すことを目的とする。
 - 3 被保護有子世帯の養育環境のあり方
子どもの貧困対策、とくにひとり親家庭の就労支援に焦点をあて、被保護世帯の養育環境を今後どのように考えていくべきか、一つの方向性を示すことを目的とする。
以上の 3 点を検証することで、わが国における子どもの貧困問題の一起源を明らかにした上で、現代日本の子どもに関する諸施策にどのようなメッセージを与えうるのかについて検討したい。

3. 少子化対策-少子化の動向とワーク・ライフ・バランスなどの政策的課題-

本研究は日本の少子化をテーマにその動向や政策的課題を抽出する研究である。

具体的には、わが国の少子化の動向をたどり、その影響を直に受けた家族や地域社会がどのように変容したのかをみる。そのあと、少子化をめぐる問題に対してこれまで日本が行ってきた対策(子育て支援施策)を三段階に分けて検証する。

また、少子化の政策的課題として重要なキーワードである「地域子育て支援」、「男女共同参画社会」、「ワーク・ライフ・バランス」を取り上げ、それぞれの成り立ちや推進する上での課題を整理し、少子化対策の今後の展望について考察する。

【研究テーマ】

「哲学対話(てつがくたいわ)」による多世代間の生涯学習について

【研究概要】

「哲学対話(てつがくたいわ)」とは、日常生活のなかで生まれる「問い」について、人びとが対話し、その「問い」の「こたえ」を探求する実践である。飲み物を片手に気軽に哲学対話を行う「哲学カフェ」や、小中学生を対象とした「p4c(philosophy for children)」など、これまでいくつかのバリエーションが提案されてきた。この実践は、「哲学」という言葉から連想されるような堅苦しいものではなく、こどもを含む幅広い年齢層を対象としている。この特徴を活かし、本研究では、この「哲学対話」を、多世代にひらかれた生涯学習——これからの複雑化・流動化する社会を生き抜く学び——の機会として活用する方法を模索している。

【研究テーマ】

- ・乳幼児のふれあい遊びについて

【研究概要】

・ふれあい遊びが、どのように親子の成長と心の安定につながるか実践を通して研究していく。ふれあうという事は、単に身体のふれあいだけでなく、言葉を交わす事や音(楽器)を鳴らす事や同じ動作をする事等、同じ経験をする事によって気持ちを通わせる事が出来る と考える。実際にふれあい遊びを通して、親(保育者)が心の充実感を得ることにより、積極的にふれあう育児の重要性を薦める事につながると考える。どのような遊びによってより充実感が味わえ、親子の距離を深める事ができるか考えていく。